

2年生プレゼンバトル開催



▲プレゼンバトルの様子

13期生では、1月28日実施のLHRで行うレクリエーションの内容を決定するため、プレゼンバトル(プレバト)が行われ、この企画は、基礎期をより良くすることを目的とした団体であるキソセカが主催した。

プレバトは、13期生が主体性や向上心を持つことを目的に、「13期生全員が楽しめる」というお題のもと開催された。1グループ1〜5人という条件で、全10組が参加した。昨年度の「開成の虎」をきっかけに、リベンジを目指す生徒や挑戦したい生徒が主に参加した。

一次審査で予定されていた企画審査は、応募数が不足していたため、免除となった。二次審査の面接審査では、キソセカメンバーとプレバト担当教員によって10組中5組が選出され、3次審査では、LHR時に多目的ホールで行われたプレゼン審査によって優勝グループが決定された。

主体性を育てる、新たな挑戦

Q1 なぜプレバトに応募したのですか？
A1 昨年度の開成の虎で優勝したことがあまり知られておらず、勿体ないと思いまして。そのため、今年も応募したいと思いまして。Q2 実施予定のレクはなんでですか？



▲優勝グループのみなさん

企画者側であるキソセカの坂本さん、古久保りりさんと柴田先生へお話を伺った。プレバトを企画した経緯としてキソセカは、「前期では主体性について取り組めなかったため、後期にプレバト

企画者の方々の想い

を通して主体性を育くもうとした。応募していない人も投票によって自分ごと化して欲しいと語った。プレバト全体を通して、柴田先生は「昨年度と比べて企画書のレベルが上がった。目的

開成の虎とは？

ケブラの改正案の作成やロッカー配置の改善、交流の活発化などの取り組みが行われていた。一年生のうちから、今自分たちが置かれていた環境をよりよいものにしよと仲間と協力し、企画を立ててそれをプレゼンする経験は、主体性や協調性を育むとともに、自ら考え行動する力を養い、今後の開成での生活に大きく繋がるのではないかと。

開成校新聞

開成中等新聞局
編集長 北條 三上
顧問 ***
*** 制作者 小川・山田・北條・佐賀野
小笠原

紙面紹介
1面 国際交流班
2面 迫る熊の危険
3面 生物野外観察
4面 プレバト

アンテナ
新聞開成でのたびたび登場するアンテナAに対する局員の意見が掲載されている。



ボランティア局 国際交流班ってなに？



▲ブラジルからの留学生の歓迎会の様子

国際交流班は、その名の通り、海外との交流を中心に活動している。主な取り組みとして、外国からの生徒が本校を訪れた際に行う歓迎会の企画や準備が挙げられる。

最近では、ドイツやブラジルからの留学生の受け入れ、また「イオン1%」の活動を通じて中国との交流など、様々な国との交流の機会があった。

また、国際交流に関するイベントの開催情報やクラスルーム内で多く共有されており、英語弁論大会や北天生との交流会など、様々な外部の企画に参加している。これらのイベントの多くは前期生・後期生それぞれが参加することが出来るため多くの生徒が国際交流を身近に感じられる機会となっている。

活動は毎週定期的に行われているわけでは

なく、国際交流のある時期を中心に実施されているが、その一つ一つが貴重な経験となっている。国際交流班は、異文化理解を深める場として今後も生徒達にとって重要な役割を担うだろう。

放課後ユニットから 外局へ変更

国際交流班は、2023年度までは天文班や化学実験班と同様放課後ユニットとして活動していた。現在は、ボランティア外局の中に組み込まれ、外局の扱いへと変更されている。その変更の経緯、意図を放課後ユニットの顧問である三上先生と生徒支援部の渡辺先生に話を聞いた。

放課後ユニットとして活動していた頃は、年に一度だけ高文連の道内大会への参加が可能だった。ただし、放課後ユニットが参加できる大会は道内大会に限られており、全国大会へ進出する制度は設けられていなかった。現在は制度変更により放課後ユニットの大会出場自体がなくなっており、高文連での大会に参加できるのは部

今回この記事を制作したきっかけは、国際交流班が外局に加わったことを詳しく知っていた生徒がほとんどいなかったからである。所属生徒に理由を尋ねたが、「よくわからない」「知らなかった」など理由を把握している生徒はいなかった。今回の変更は主に先生方の間で決定され、生徒へ大きな説明はなかった。その結果、多くの生徒が経緯を知らないまま組織だけが変わった。

変更の経緯 生徒は知らされず

生徒会規約では、外局は生徒会への協力と校外活動を自主的に行う組織と定められている。生徒主体の活動であるにもかかわらず、その在り方について生徒に確認や説明の機会がなかったことは疑問が残る。

決定そのものより、その過程が共有されていなかったことが問題ではないだろうか。生徒会が本当に生徒たちの組織であるためには、生徒たちが情報を知り、考え、意見を持つ機会が必要である。(北條結菜)

また、放課後ユニットは単年度の活動を原則としている。活動が希望する教員や生徒がいなければその放課後ユニットはなくなる。しかし、国際交流は本校の大切な特徴の一つである。キャリア支援部でも国際交流に関する情報提供は行っているものの、業務量が多くなって対応しきれず、国際交流班が下請けのような役割を担っていた。国際交流班の活動を外局に取り組むことにより、その活動の継続性を担保できる。

加えて、国際交流イベントの運営ボランティアや交流活動の支援など、ボランティア局の役割と重なる部分が多かったことも、外局へ移行した大きな理由の一つだといえる。

SSHに影響大 生物野外観察の1/2が中止に



▲取材に答える越野先生

今年度、本校で予定されていた生物野外観察がクマの出没を理由で中止となった。今回の判断の背景や今後の在り方について、担当教員の越野真嗣先生に取材した。

SSH生物野外観察が実施地域周辺クマの出没が相次いだことを受け、通年全4回のうち、西岡水源公園と宮島沼で開催予定となっていた第二回、第三回が中止となった。

越野先生によると、明確な判断基準があるわけではないが、生徒の安全を最優先に総合的な判断が行われたという。

今回は、観察地域から数km圏内でクマの出没が連日報告され、注意喚起の報道が続いていたことが中止の大きな要因となった。

判断にあたっては、自治体や実施地域の管理者、外部関係者と事前から連絡を取り、クマの出没情報を迅速に共有している。

食料を求めて町へ

観光庁の2026によると、北海道のヒグマだけで少なくとも、本州の各地でもツキノワグマ出没件数が増加している。

この理由は何となくの凶作が原因だとされている。2025年は、食料の中心となるどんぐりが東北地方では大凶作、関東地方で凶作と食料不足が問題となっている。食料不足の熊は、食料を求めて町へ出てくる。北海道ではどんぐりに影響を受けにくいヒグマが冬に確認されている。原因の一つとして、鹿の個体数増加が考えられる。鹿が増加することでヒグマの食料の一つである植物を鹿が食べ

てしまい、食料不足に陥る。そのため、ヒグマも食料を求めて町に現れる。また、食料不足により冬眠をしても早く目覚めてしまい、冬にも町に出没する熊が発見されている。

どちらの熊も、人と出会うと捕食目的であったり防御のためであったり人々を襲うことも多く人里に出てくる熊も増えているため、熊に注意する必要がある。(山田寧々)

無事に開催できた 第一回・第四回

6月21日に第一回SSH生物野外観察がおたる水族館で行われ、3、5年生計30名が参加した。

事前学習では参加生徒がそれぞれ与えられたいくつかのテーマから自身の興味のあるテーマを選択し、各自で調査を行った。

また、10月25日には野幌森林公園で第四回が行われ、3、5年生の計27名が参加した。自然ガイド

(小笠原真)

熊 出没が 急増中 市街地に迫る身近な危険

2025年、札幌市では熊の出没情報が過去最多となった。市民にも自らの安全を守るべく強く求められている。

札幌市HPによると2025年12月時点、札幌市で報告された熊の目撃件数は362件に達し、過去最多であった2023年の257件を大幅に更新した。

例年熊の出没件数が多いとされている。南区に加え、今年には中央区や西区といった、これまであまり報告のなかった地域にも出没しており、市街地近くへの拡大がみられる。出没のピークは9月、11月であり、全体の約68%がこの期間に集

熊のなかには皆に愛されているクマたちも多々いる。そんなクマたちをいくつか紹介する。

【メロン熊】

2009年に北海道夕張市の北海道物産センターで生まれたメロン熊を荒らし、おいしいうどんを食い荒らしたことで変貌した熊である。リアルで凶暴な姿に、怖がられながらも多くの道民達に愛されている。

【プー】

1926年出版「クマのプーさん」が原作であり、ディズニーがアニメ映画を作成したことで大ヒットした。のんびり屋ではみつもが大好きなクマであり現在でも多くの人に愛され続けている。

クマがモチーフにされたキャラクターは他にも多くあり、どれもそれぞれの国や地域で親しまれている。

♡ 愛されクマたち ♡



▲熊出没マップの一部

自分の命を守るため 熊対策

安全対策には、熊に遭遇する前と遭遇した時により変わる。遭遇する前のため対策として、熊鈴と全国くま出没マップがある。

熊鈴は、音で人間の存在を気づかせ、熊に自分を避けさせる役割がある。しかし、人に慣れてしまっている熊に効果が低い可能性がある。熊鈴よりも機械音の怖がる性質があるため、スマートフォンアラームなどの音を流すと効果的である。

全国くま出没マップは、日本各地の熊出没情報と熊が出没する可能性がないかの安全レベルを確認することが出来る。自治体や住民投稿などの情報から作成されており、アプリ「くまMAP」から確認できる。

遭遇したときのた

熊対策グッズ



▲熊対策グッズ

情報が増えたことで、保護者や学校関係者からは不安の声が上がっている。そのため、登下校に合わせて見守り活動を行っている地域もある。

また、開成高校時代から2019年度までの期間で行われていた全校競争が中止になった理由の一つにも、熊の出没が挙げられる。生物野外観察も含め、生徒からは残念がる声も聞かれた。

西区では今年9月、平和丘陵公園で犬の散歩中であつた遭遇が、熊の親子と遭遇し、右腕を引っつかれたことでヒグマ警報が発せられた。

熊の出没が市街地に広がることで、市民生活にも様々な影響が及んでいる。公園や通学路での目撃

多かったが、安全を最優先とした判断だったといえる。

2025年の漢字「文字」では熊が選ばれているほど印象に残った出来事である。熊

の出没は市民の暮らしに直結する問題として、札幌市全体に広がりを生じている。(北條結菜)

来年度以降については、「クマの出没は予測できず、今日の判断が正しかったのかは明確には分からない。さらに、冬眠しないクマが近年出てきているため、冬の開催も難しい」とした上で、「施設内観察などの野外学習の形になる可能性もある」と学習体制の課題と変更の余地を挙げた。

今回の中止は、クマが、私たちの学校生活にも直接的な影響を及ぼしていることを示す象徴的な事例となった。(小川藍)

当日の午前中は各自で自由観察を行い、現地で見かけた熊の出来のない情報を収集した。午後は事前学習で調査したことや午前中の観察での学びに加え、各自でスライド等を用いて水族館の一般客に向けて発表する活動を行った。知識や学びをアウトプットすることで、選択したテーマについてより理解が深まった。

また、10月25日には野幌森林公園で第四回が行われ、3、5年生の計27名が参加した。自然ガイド

の小林峻さんを迎え入れ、大沢口から桂コース、大沢コースを通る約4kmの散策路を歩き、紅葉、種子、野鳥などの様子を観察した。

散策中には、様々な植物の種子散布戦略、昨年度との落ち葉の比較等を行った。

今回の両研修は、座学だけではなく、自分の肌で感じて知見を深めるといった経験ができる良い機会となった。(小笠原真)